海へ飛込ました、天氣はよし浪は靜だし暫時游て居ました、もうあがろうと思まして岸邊まで游着て立うと致ましたが、何うしましても立ませんばかりか沖の方へ引込まれそうです、何うしたのかと思ますと浦の子が云て居りました「いまき」という沖の方へ引て行潮の中へ這入てしまつたのでした、此は大變と思て一生懸命游ましたが手や足が疲れてもう沈でしまいそうになりました、すると後から大きな濤がよせて來まして次郎を其中へ卷込で、微い軟い砂の上へ打揚ましたが、もう其處で氣絕してしまいましたのです、他の生徒はそら海へはまつたという騷で先生の處へ走附たので、先生は驚て飛で出になりました、其時は丁度次郎が濱へ打揚られた時であつたのです、どうでしょう陰でいたづらをすると、こういふことになるのです！、次郎は宛然死だ人も同じになつてしまいました、先生は耳の側て次郎々々とお呼になつた其聲が不思儀ですね、次郎の耳へは毎朝起して下さるお母樣の嬉しいお聲でございましたそうです、次郎は氣が附て眼が覺て、海邊だと思いの外住家の例の衾の上で、枕元には上着も下着とさあお着なさいという風に待て居る、お床の上には机、机の上には本やミットが例日の通にありました、而して寢衣は汗で濕然として居りました、次郎はよく〳〵考てみると夢、實に夢で在たのです、昨日あまり水を飲過苦かつた爲に夢を見たのでありました。

洗つてはいやだ。洗つてはいやだ。

と今年七歳になる、鈴ちやんが、湯殿で泣きながら、女中を、叩いたり、蹴たりして居ます。

そんなことを仰るなら、もー豚の處へ、往ておしまひなさい。ほんとに汚な好きのお子だ。

と云つて、女中の松は、泥だらけな、鈴ちやんの兩手を、摩て居ます。

其方が好い。汚い方が好い。

と鈴ちやんは、喚いて、手拭を窓から投たり、石鹸を板の間へ、叩きつけたり、しますから、松も手のつけやうがないので、半分洗ひかけたまゝで臥床へ抱いて往て、おとなしくお寢みなさるのですよと、云ひ聞かして寢かしました。

鈴ちやんは、少時の間窓から窺き込んで居る、お月樣を見て目をパチリ〳〵させながら、

お隣の家の、豚の處へ往かう、そーすれば食べたり寢たり、芥の中へ轉げたり、する斗りで、お湯へなんか、少とも入らなくて、いゝのだから、と獨語をして、考へて居ましたがやがて密々と起きて、そーッと裏梯子を降りて、椽側から庭へ出て、木戸口から、お隣の豚小屋へ、往きました。

其中には、小さい豕が二疋藁に包て、よく眠て居ます。鈴ちやんは密り隅の方へ、入り込んで、お湯を使はせる松やも、「お前垂を、汚しては、いけませんよ」と仰る母樣も、居ないで、只豕と一所に遊んだら、如何に面白かろーと、莞爾々々して居ました。

翌朝、鈴ちやんは、お隣の伯母さんが、豕の桶へ牛乳を入れる音で、目が醒めましたが、伯母さんが、往てしまふまで、靜として居て、やがて、這

人出して、片乳を欲しいだけ飲んで、お芋の尻尾や、お冷飯を食べました。此品々は、豕にと云ッて、置いてあるのですけれども、肝心の豕は、まだ目が醒めないのです。鈴ちやんは、養べて終ふと、芥を堀て、其中で、緩りと眠ました。

こーして、晝間はかくれて、夜になると、自分の家へ行て、窓から臺所へ入り、戸棚の種々な甘い食物を、澤山持出しました、そーして寢衣のまゝで、方々歩き廻て、花の眠るのを見たり、小鳥が巣の中で、チユッ〳〵と鳴くのを聞いたり、螢や蛾の遊ぶのを眺めたりして、喜びました。誰も鈴ちやんの、こんなことをして居るのを、知ッた人はありませんから、鈴ちやんは獨りで、月光を浴びて、飛んだり跳ねたり、大層面白がッて居りました。

草臥れば、豕の處へ行て、一日寢て、只乳や食物を、人が持てくると、其を食べに起きるばかりです。一体此豕を、飼て居る伯母さんは、大層豕を大切にするので、清潔な藁を、度々入れたり、食物なども、出來るだけよくしてやります。

鈴ちやんが、長い間、こんな變な生活をして居ます内に、段々人間の子といふよりは、豕の方に近くなてて來ました。寢衣は汚れましたし、髪と云ッたら、櫛を通した、こともなし、顔は洗ったことなし、泥を掘るので、手は豕の足のよーになッて、しまひました。夫でもー、お話もしないで、豕のよーに唸りますし、食物で豕と喧嘩したり、何か食べるにも、鼻ごと桶の中へ、突込んで食べます。

初の中は、夜になると、遊びに出て、食物を盗で

歩きました。其時分盗まれた人々は、盗人を捕へると云つて、庭に罠を仕掛けるやら、鈴ちやんの家の、料理番も、近頃鼠が、臺所から、れ菓子や豆を持ち出して、いけないと、ブツ〳〵云つて居ました。處が、其中に鈴ちやんは、余り肥つたので、大儀で眠るのと食べるの外は、何をするのも、いやになりましたから、少も小屋から、出ませんでした。そーして、四這ひに歩きますから今は尾の生えないのが、不思議な位でした。

夏中は、豕と遊んで、面白いとも、思ひましたが秋が來て、漸々寒くなりますと、サア暖なフラネルの着物が、戀しくなるし、冷い食物がいやになるし、火鉢へあたりたく、暖なお汁が、食べたくなりました。けれども、今更家へ歸るのは、きまりが悪いので、どーしたらよかろーと、困てしまひました。そこで豕に「お前は冬はどーするの」と尋ねましても、只唸るばかりです。そーして、毎年冬になると、此小屋は空になるのですから、豕は、どーなつてしまふのだろーと、其處が一向鈴ちやんには、分りませんでした。

或晩恐しいことが、起りました。其は鈴ちやんが、暖まろーと思つて、肥た豕の間へ潜り込んで、まだ指の先が冷いので、切りに藁を、ゴソ〳〵引張て、居ました處が、隣の伯母さんが、息子に、こー云つて居るのが、聞えました。

明日は、豕を殺そーヨ。ずいぶんよく肥つたから。それだから、今夜中に、庖丁をよく研いで置て、おくれ。

アヽマア私はどーなるのだろーと、鈴ちやんは、砥石が、ゴシ〳〵擦られる音を、聞きながら考へ

ました。

私はすつかり豕のよーだから、必一所に殺されてしまふ。今逃げ出さなければ、鹽漬にされてしまふ。もー豕ゴッコは、いやになつた、樽の中へ、詰められるよりは、一日に、百遍も、お湯へ入れられる方が、まだまシだ。

鈴ちやんは、こんなことを、考へながら、朝まで戰へて、臥て居ましたが、夜が明けると直に、庭から家へ、走つて行きましたら、丁度裏口があいて居ました。そーして、下女は火を焚かうとして、薪を物置へ取りに行つて、居ましたので、鈴ちやんは、コソ〳〵梯子を上つて、お部屋へ行きました、直ぐ臥床へ入ろーと、思つて、ちよいと鏡を見ましたら、鏡の中に、襤褸と芥に包まれて、毛は蓬々として、泥だらけな丸つこい鼻のある、眞黑な動物が、居ました。

あれが私かしらん、何て汚ならしいのだろー。と、鈴ちやんが云ひまして、どーも眞白な寢床を、汚したくないと、思つたものですから、行水盥の中へ、飛びこんで、一生懸命に、体中を洗ひました。夫から清潔な寢衣に、着かへて、髪を抓て、長い爪を剪りましたら、元の美麗な、お孃さんになりました。そこで、友禪染の可愛らしい、夜具の中へ入て、横になつて、清潔な上敷や、柔な毛布や、自分の小さな枕を、再び使ふのを、大層喜んでよく眠てしまひました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

サア良い子だね、お起き。新しい着物と、好いお前垂があるよ、母様が拵へて上げたのだからご覽、今日は、お祭で、花ちやんも、照ちやん

も、皆お呼ばれに來るよ。

とお母樣が、柔しく仰いました。鈴ちやんは、いきなり飛び上つて、大きな聲で、

殺してはいけない、どうか殺さないで、私家ではない、子供だ、子供だ、家へ歸して下されば、洗ふ時に、もう必怒らない。

と叫びました。

どーおしだへ、何を恐がるの？、

と、お母樣は、鈴ちやんの樣子を、見て、笑ひながら、仰いました。

鈴ちやんは、今まで不思議な生活をしたことを、殘らず母樣に、お話をしましたが、

其は夢だよ、お前は何處へも行きはしなかつたよ。昨夜松やを、ひどい目に逢せてから、茲でよく眠て居たもの。

と、お母さんの仰るので、又驚きました。

ア、夢々い、夢！私之から、清潔にすること、好になろーや、松や、石鹼持ておいで、そーしてお前の好いだけ、こすつておくれ。もー少とも、打つたり泣いたりしないから。

鈴ちやんは、無事に樂しい家に、居たのを喜んで、

決して汚い怠けた、ぶた娘ではないといふので、跳り廻つて、右のよーに、云ひましたトサ。

湯屋の大黒天

三河境川源　近藤とき子

或る處にそれは〳〵極正直で人の應待の好い湯屋がありまして、毎夜大賑やいであります。其の隣に又性質の至つて好くない醫者がありました。診察が下手な上に藥價が吃驚する程高いのですから、誰れも診て貰ひに行くものはありません。或晩の事、この醫者が、お隣りの湯屋へ行きました所が、餘りに賑ぎやうので、どうにも妬く思つて湯を使つて居ると、不圖向ふの柱に大黒天が祭つてありました。そこでお醫者は、『やあ、當家の繁昌するのは別ではない、彼の大黒天があるからである』と想ひましたので、急に夫が慾しくなつてそーつと盗んで家に歸り、神棚へ上げて祭りました。所が其の夜一時過ぎになると、『お願ひますお賴みます』と戸を敲きますから、奥さんが起きて、戸を開けますと、血氣な男二人り這りまして『隣村の者でありますが、昨夜から父親病氣に罹られまして今の樣子では、明朝までの生命が覺束ない樣に思はれますから、一度お診察が願ひたいと思つて參りました、誠に夜更で濟みませんが、どーぞ、今から私等と一所にお同道お診察してくたさい』と賴みますと、醫者は直樣起き上つて『ハイ宜しい』、〳〵身仕度をなし、男に連れられて往きました、道すがら是も大黒樣のお蔭で、錢儲けの端緒が出來たのだわいと思つて山路へ行き掛りました。すると、前の男俄かに懷劍をすらり〳〵拔